

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

### 土屋 有里子 「『沙石集』諸本の成立と展開」

#### 審査要旨

本論文は、鎌倉時代後期に成立した、僧無住(1226~1312)著の説話集『沙石集』の伝本研究である。『沙石集』は比較的多くの伝本が存在するものの、伝本間の内容の相違が校合不能なほどに大きい場合がある。また弘安二年(1279)起筆、一時休筆の後、同六年(1283)に成稿、さらに少なくとも永仁三年(1295)と徳治三年(1308)の両度にわたり補筆が行われ、しかもその間他者による改変が施された可能性も想定されるなどの成立事情の複雑さが、伝本関係の錯雑に投影して、諸本論がきわめて困難な状態にあった。旧来はこれを大きく広本系と略本系とに分ち、数次の補筆改訂の間に、広本系から略本系へと割愛・推移して諸伝本が成立したとする説が行われていた。このような旧説に対し、これを本文内容自体の古さの程度によって、古態の本文を有する古本系と、版本およびそれと同系本文を有する流布本系とに二分する新説が、本論文の審査委員の一人でもある小島孝之教授によって提唱された。土屋論文はこの新説に導かれつつ、各伝本の内容について、二度にわたる補筆改訂の形跡を分析・確認する作業を通じて、諸本の位置付けをさらに明確化することを目指した。この作業の中で、著者無住の作風の分析や、伝本の再評価を行い、『沙石集』というテキストそのものを定位することを試みた。個々の伝本の網羅的な検討と細部の不審点の解明という点にいくつかの未解決課題を残しつつも、所期の目的はほぼ達せられている。諸本間の関係が錯綜して全体像の把握が至難とされる『沙石集』の伝本研究に格段の進歩をもたらす、本格的な伝本研究となったと評価できる。以下、全体の構成に従って報告する。なお本論文には付録として「資料編」一冊が付属しており、無住関係略年表、『沙石集』説話対照目次表①②、『沙石集』和歌一覧、『雑談集』和歌一覧、内閣文庫蔵『沙石集』翻刻からなる精密なものであるが、報告の対象としたのは「本文編」の論考全体である。

本論文は序章および三部の論から構成される。序章「『沙石集』伝本の課題と展望」は、これまでの研究成果を、渡辺綱也による諸本論と小島孝之による新説との比較を中心に手際よくまとめ、さらに本論の目的を明記したものである。ただし小島氏の伝本把握の体系をそのまま踏襲した結果、『沙石集』伝本論を根底から覆すという野心的論考というよりは、従来の伝本論の精密化・厳密化を目指したものとなっている。もちろん重厚な先学論考を強引に批判する必要はなく、奇をてらった独断的推論を立てるのは慎むべきであり、その点、申請者の論考は着実な内容と評価できる。しかしながらそうした場合は極限までの厳密化が求められるはずであるが、執筆者自身が認めるとおり、未解決課題が少なからずあることは惜しまれる。今後のさらなる精進が期待されるゆえんである。

第一部「古本系諸本の成立—十二帖本—」は、同系本中の最古態本とされる俊海本残欠三巻の検討である。ここでの中心は貞慶作『興福寺奏状』が俊海本の残欠部分に与えている影響の検討であり、無住の説話編者としての手法を解明することに力点がある。一見伝本研究とは無縁の作業ながら、これが他本における改訂の形跡検討に際し、改訂者の同定に威力を発揮することになるので、重要な前提となる論考と評価できる。ただし無住による加筆の意図が解明出来ない説話もあり、そこに若干の課題を残す。

第二部「古本系諸本の展開—十帖本—」は、従来草稿本かと期待されていた梵舜本と、これまで非公開で研究者未見の伝本であった成實堂文庫江戸初期写本の、それぞれを分析する。かつて

梵舜本を最古本として、そこから米沢本等を経て流布本へと整理・割愛されたとする通説があったが、本稿ではそれを否定し、最古態本である俊海本と同系完本の米沢図書館本に比して、梵舜本では東福寺関係の記事などが増補されていることを指摘し、それが無住による加筆の結果であることを論証した。すなわち米沢本→梵舜本→流布本という流れを新たに定位したわけである。梵舜本の性格がこのように明確に位置付けられたことが『沙石集』伝本研究に与える影響はきわめて大きく、これにより現存諸本間の関係についての概観が明確化した意義は高く評価できよう。また成篁堂文庫本については、第一次成立本の姿を反映するとされるいわゆる五卷本系諸本が、実は完本である成篁堂本の同系残欠本に過ぎないことを論証し、成篁堂本が古本系統ながら流布本との中間的な性格をも有する伝本であると位置付けた。これら残欠本と成篁堂文庫本との先後関係の確定に課題を残すものの、これにより古本と流布本の関係はさらに明確化した。

第三部「古本系諸本から流布本系諸本へ—流布本系諸本の初期の問題—」は、古本系本文と流布本系本文の中間的特徴を有する内閣文庫蔵本と、書写年代自体は全諸本中の最古に属するものの本文は流布本系である長享本に関する考察である。内閣文庫本は、前半と後半とで系統の異なる伝本を取り合わせた混態本の由で巻一～五、巻九の六卷分はとくに裏書を豊富に備える点に特色があり、その検討が中心となった。なお残りの四卷分は刊本と同系の由である。裏書と本文との関連付けに関する考察にややわかりにくいことがあり、そもそも裏書という以上は原態が卷子本形式であったはずであるが、その形態が冊子に移し替えられる時点で必然的に生じるはずの諸問題—料紙の錯簡、裏書と本文との関係性の喪失などに関する考察が欠けているのは、諸本論としては不備を感じる。また梵舜本やその他の本にもこの裏書という現象は存在し、第二部では梵舜本の裏書を検討しているのであるが、両本の裏書に本質的相違があるのかどうかは不明であるために、この二つの作業の位相の違いについてもわかりにくくなっている。全編を通じて最も難解なのが、この章であった。ただし長享本の性格考察について、該本が無住による第一次改訂以後、同じく第二次改訂以前の姿を伝える本であることを明らかにした意義は大きく、また各伝本間の複雑な相互関係からは孤立した本であることも報告された。孤立的な本であるがゆえに伝本研究上の意義は大きくないと結論するが、『沙石集』伝来史・享受史を構想するときには、この本が大きな役割を果たすことになろうと期待される。

以上本論は、錯綜する『沙石集』伝本研究に新段階をもたらしたばかりでなく、本格的な作品論の構築に向かって着実な一步を踏み出すための布石となることが確実視される。ここに本論文を、早稲田大学における博士（文学）の学位に値するものと判断する。

2006年7月26日

主任審査委員	早稲田大学教授	博士（文学）早稲田大学	竹本 幹夫
	早稲田大学教授	博士（文学）早稲田大学	小林 保治
	早稲田大学教授		兼築 信行
	成城大学 教授	博士（文学）東京大学	小島 孝之